

# 英語／日・仏語型の 使役構文と動詞句内屈折図式

一 可 変 範 疇 ・ 態 選 択 機 構 ・ 接 合 刻 印 の 概 念 一

田 原 薫

## 0. 序説

本論考は一見 G B 理論のような、範疇と句構造を基本に据えた純形式論的な統語論と見えるかもしれない。しかしそこに現れる範疇も句構造も、実は意味（機能）論を先行させた位相論的統語観(Topological View of Syntax)に基礎を置き、その視点で言う文法機能の担い手たる辞項をうまく組織化して、G B 理論の技法の一部が適用できる形にしたものである。従って、変形文法家にも納得してもらえる（であろう）ことを期待している。

句構造図式あるいは階層型構成素構造図式を公理のように自明のものとして理論構築の根幹に据える統語論では、なぜか直観的に、屈折要素を V P（動詞句）の外側に、換言すれば樹形図表示でより上部に掛かる要素として扱い、結果として I P（屈折要素句）が V P を支配するのを当然と見なす論法が圧倒的なようである。少なくとも変形生成文法ではその揺籃期の版から最近の「経済性の原理」に基づく版に至るまで（たとえ I P が AgrP と TnsP の 2 段階に分割されても）一貫してそうであった。しかし素朴な初心に立ち返って眺めると、このことは「自明の公理」ではなく、別の組織化も充分可能と思われる。

本論考では既成常識に反して V P の方が内部に I P を抱えているような図式を提案し、その説明力を検討してみる。まずわかりやすいメリットは、動詞の必要とする項（候補）がすべてその c 統御下に生起することであり、項の起源的分布状態が顕在的に動詞の種別（4 種類のいずれか）を決定〔＝下位範疇化〕することである。

上述の、4 種類の動詞類を決定する構造上の特徴は次の表の通りである。

表

	V の直轄統率下に…	(V に統率される) I P の中に…
他動詞（能動）構文	(目的語) N P あり	(主語候補) N P あり
能動態的自動詞構文	(目的語) N P なし	(主語候補) N P あり
中動態的自動詞構文	「目的語」N P あり *	(主語候補) N P なし
非人称天候動詞構文	(目的語) N P なし	(主語候補) N P なし

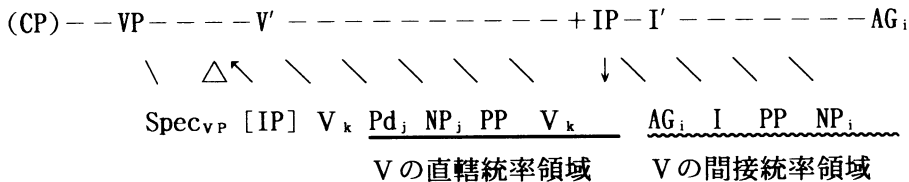
\*ここで特に「目的語」と書いたのは、摘出されて表層では主語になるからである。

本論考の基調低音をなすのは上述の「V P 内 I P 図式」であるが、具体的に扱うテーマは英語の能動・受動構文の生成と、英語の使役構文、日本語・フランス語型の使役構文、英語における do-来援の問題などである。

## 1. 「VP内IP説」の概念把握

ところで句構造は普通上下に書くが、スペースの節約上、同じ top-down 型でも横一列に、すなわち左端が最大の集合で・右に行くに従ってそれを順次分割して見る型に直して書く。図 1 は典型的な「V P 内 I P 図式」の句構造で、基底の構造に相当する。

図1 [AGとPdは資格述語という要素で、そのうちAGは一致要素の乗り物。]



この図1の特徴は、同じVが（そして同じAGも）2回出現することである。ここでいうVは変形文法のそれよりも抽象的なものであって、 $\alpha$ ) 目的語や必須斜格項を統率する機能、 $\beta$ ) 主語候補NPと時制要素（I）を統率する機能、 $\gamma$ ) 動詞の音形を指定する機能、という三つの機能を表わす。図1に現れた二つのVはそれぞれ $\alpha$ と $\beta$ の機能を果たす位置に相当する。最初（左）のVは「目的語」NP<sub>i</sub>（と、その資格述語Pd<sub>i</sub>）を統率するが、そのスコープは2度目（右）のVの出現によって中断される。この第2のVはIPを統率し、従ってIとNP<sub>i</sub>（主語候補）をも統率する。 $\gamma$ の機能はVのどちらかの位置で実行され、同じ音形が2箇所に出現することはない。英語では前（左）のV位置で、日本語では後（右）のV位置で実行されることになる。

I は具体的な時制接辞などではなく、動詞の時制を指定する抽象的な機能であり、従って動詞よりもさらに抽象度が高い。ところで印欧語ではこの時制指定機能を実行するに際して、顕在的にせよ潜在的にせよ「主語」と、主語に関する（切り詰められた）情報すなわち人称・数・性（：たとえばロシア語の過去時制の場合）を時制と同時に組み込まねばならないように、形態法を選択してしまっている。これは日本語母語話者から見ると興味深い、不思議な現象であり、その解明には深い哲学的考察を必要とするが、とにかく現実がそうなのだから、今は理屈を言っても始まらない。そこで、I は主語候補NPを「統率」（厳密にはGB理論で言う統率ではない）し、主語に関する情報の乗り物AG（資格述語）を指定辞に取ってIPという情報単位を作るものとする。このIPは基底ではV（の $\beta$ 機能）に統率され、その成員はVに間接的に統率されることになる。図1では（ $\alpha$ 機能の）直轄統率領域と（ $\beta$ 機能の）間接統率領域を別々の下線で示した。

これが基底の構造であるとする、ここからIPが+の所で切断され、移動して[IP]として△の位置に接ぎ木(graft)される、と考える。△の節点はV'の繰返しと見てもよいが、

[illegible]

$\diagdown$   $\triangleleft$   $\diagup$   $\diagdown$   $\diagdown$   $\diagdown$   $\diagdown$   $\downarrow$   $\diagdown$   $\diagup$   $\diagdown$   $\diagdown$   
 Spec<sub>VP</sub> [IP] V<sub>k</sub> Pd<sub>j</sub> NP<sub>j</sub> PP V<sub>k</sub> AG<sub>j</sub> I PP NP<sub>j</sub>  
 $\uparrow$  break  $t \rightarrow t -$  (=Pd<sub>j</sub>) \* the vase

- 3 -

できよう。すなわち *Le vase se casse*.「花瓶が割れる」においては、英語で空白(\*)になるPPの地位を *se* が占める〔従ってこの *se* は一種の斜格〕と考えればよい。

## 2. 能動者の封じ込めによる受動構文の起動

图 4

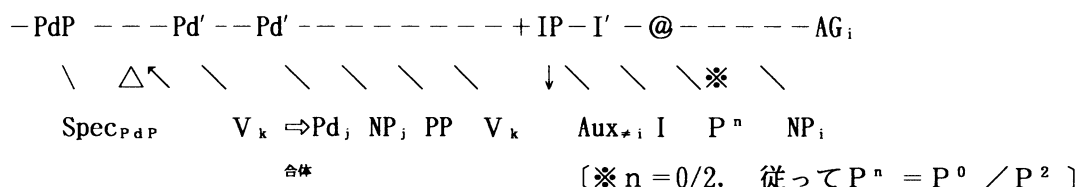


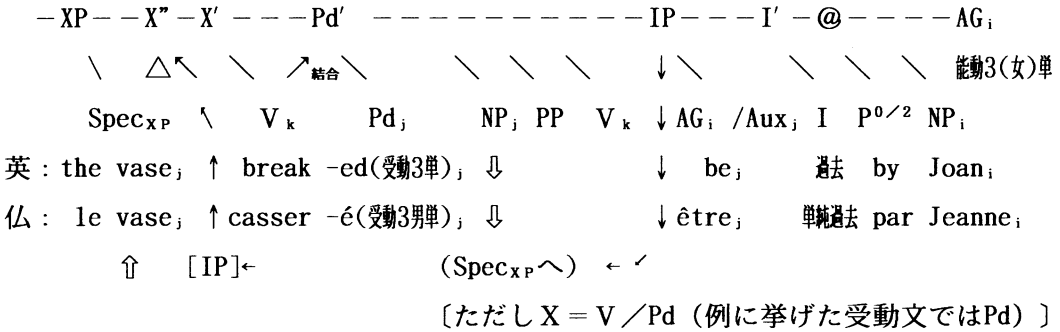
図4は受動構文用の句構造であるが、骨組みそのものは能動構文と同じで、ただ大きな相違は節文全体の資格がVPでなくPdP(述語句)となっていることである。つまり過去分詞を主要部とする「過去分詞句」と見たことになるが、首唱者としては排他的にそれにこだわる気はなく、AuxP(助動詞句)と見る見方も容認できる〔その場合はIPがAux'になり、△節点がAux''となろう〕。

図4の、IPの末端部は特殊な装置で、@で示される「可変範疇 (flexible category)」である。@に付く枝の選択値で、 $P^n$  が  $P^0$  か  $P^2 (=PP)$  かであるに従って@の資格が次のように変動する。すなわち  $P^n$  が  $P^0$  (前置詞) の場合、 $NP_i$  と  $AG_i$  とで構成された  $Nx$  (nexus, 対結) が  $P$  に L-mark されているから、@は  $P'$ 、ひいては  $PP$  となる。他方、@に付く枝自身が  $PP$  になってしまえば、補部や指定部を要求しないから、この  $PP$  は空虚な修飾語であり、@は依然  $Nx$  に留まる。このように資格が変動する@のような構造を「可変範疇構造 (flexible category structure)」と言い、それを起動した  $P^0/2$  のような選択的な範疇を「スイッチ範疇 (switch category)」と呼ぶことにする。

図4の場合NP<sub>i</sub>が@=PPの中に囲い込まれると、もはや摘出されて主語(図1, 2, 3のSpec…)に昇進することができない。またNP<sub>i</sub>に対する一致要素の乗り物(=抽象的な能動者資格述語)であるAG<sub>i</sub>も囲い込まれるから、IPに付く枝にAG<sub>i</sub>が進出することもできない。従って図4でのこの枝の値〔これまた可変範疇〕にAuxが選択され、図4に見るように指標として「≠i」が付く。このことはAuxの一致の相手としてNP<sub>i</sub>が選ばれず・別のNPが選ばれることを意味する。そのNPはNP<sub>j</sub>を措いて他にない。そこでAuxはAux<sub>j</sub>となり、Spec<sub>PdP</sub>へ昇進したNP<sub>j</sub>と一致する。一方、I(時制)は今度はAuxと結合するから、能動態の場合(図2)とちがって、V<sub>k</sub>はIと結合することができない。また、繫辞であるAuxはその補語として述語(Pd)の投射を要求するから、Vは補語の主要部になれず、抽象的な受動者資格述語Pd<sub>j</sub>に従属しつつ合体し、過去分詞を形成する。

結局、やや難物だった受動文の扱いも考慮すると、英語の基本的な態構文を産出する共通の基底としては、次のような「X P内I P型」の句構造を用意すればよいであろう。それを使って *The vase was broken by Joan.* とそのフランス語版の産出を考えてみる。

図5 例：The vase was broken by Joan. / Le vase fut cassé par Jeanne.



ただ受動文で、The vase was by Joan broken. / Le vase fut par Jeanne cassé. のように「ドイツ語式」(cf. Die Vase wurde von Johanna gebrochen.) の語順になってしまわないためには、@の所で切断して語順調整規則をかける必要が出てこよう。

受動文はスイッチ範疇として  $P^0$  が選択された結果であるが、同じ基底構造で  $P^2$  が選択されれば能動文 Joan broke the vase. が産出される。読者各位、確認されたい。

### 3. 英語の使役構文は埋め込み型――日・仏語との相違

英語の使役構文たとえば ‘I make John read this book.’ は日本語の「私がジョンにこの本を読ませる」やフランス語の ‘Je fais lire ce livre à Jean.’ と違って、連鎖動詞構造を含まず、従属節が主節に埋め込まれた形をしている。この構造は、一旦従属節の主語を作っておき、それを主節と共有する図6の形となる。

図6

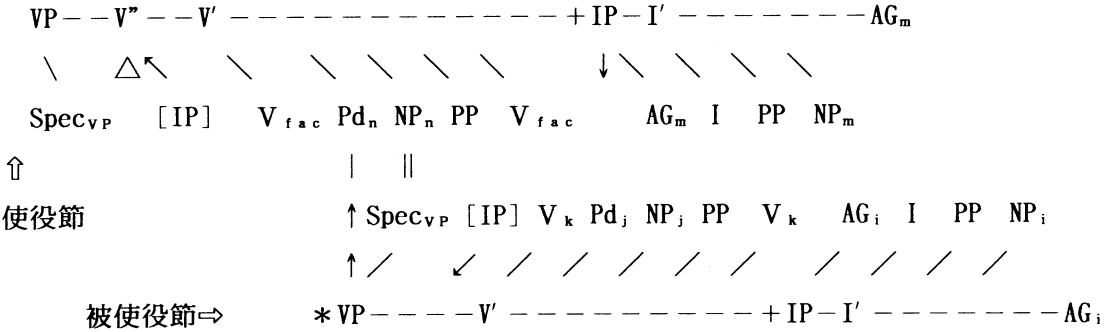


図6で、被使役節(従属節 \*VP)の主語( $\text{Spec}_{VP}$ =もと  $NP_i$ )は使役節すなわち主節の  $V_{fac}$  (=make) の目的語  $NP_n$  と義務的な共指示の条件のもとで接合されている。また、被使役節全体が  $Pd_n$  の内容として使役節すなわち主節に埋め込まれている。この構造のお蔭で  $NP_n$  には  $V_{fac}$  から対格が付与される。同じNPが従属節の  $\text{Spec}_{VP}$  として主格を付与されることはない。なぜなら従属節の  $I$  は独立の時制機能をもたないからである。従って格の衝突の心配はない。なお、当然ながら図6の図式は  $V_k$  が他動詞であっても自動詞であっても均しく成立する。この英語型の使役構文の特徴は、一旦従属節の「主語」( $\text{Spec}_{VP}$ ) ができてから、それを共通の成分とする形で従属節が主節へ埋め込まれることである。

#### 4. フランス語／日本語タイプの使役構文――接合刻印型

さて今度は、「VP内IP説」（より正確には「XP内IP説」）によってフランス語の使役構文を分析することを試みる。この説の特徴は、必ずしもすべての構文が、唯一の最高節点(sov<sup>er</sup>eign node)に支配される単線型の句構造に還元されるとは限らない、という思想である。英語の使役構文における埋め込み型と異なり、このタイプは、平行して置かれた句構造の接合による情報の流し込みが関与する、と考えられる。

图 7

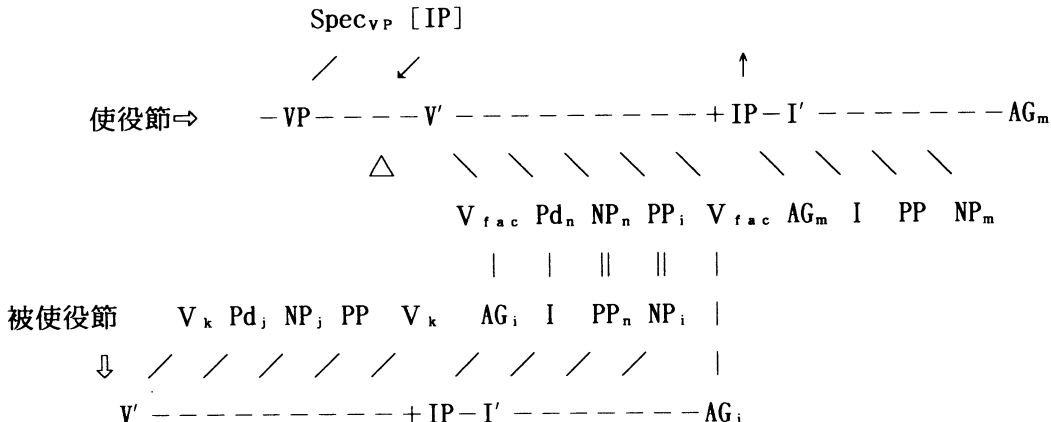


図7で  $V_{fac}$  は使役動詞 (faire/させ) である。これを含む節 (使役節) の  $V$  から  $V$  までの枝はそれぞれ被使役節 (組み込まれ節) の  $AG$  から  $AG$  までの枝と、図のように1対1で接着されている、と考える〔 $\parallel$  はさらに共指示であることも示す〕。従って被使役節からは  $IP$  を引き剥がして動かすことができないから、不必要な移転予定地から上部は削除する。従って被使役節は  $VP$  でも  $V'$  でもなく、 $V'$  にすぎない。使役節の方は  $IP$  が自由であるから、 $IP$  は定石に従って上昇して  $\Delta$  位置に接ぎ木される。使役節が能動態であれば  $NP_m$  が  $Spec_{VP}$  に進出するであろう。被使役節の  $NP_i$  はその内部で目的語となり、対格を付与されるから、組み込みの影響を受けない。一方  $NP_i$  の方は前述の接着のおかげで主語になる道をふさがれているので、共指示の関係で  $PP_i$  と再解釈され、使役節の側から与格の標示を受けることになる。以上はたとえば 'Je fais lire ce livre à Jean.' 「私はジャンにこの本を読ませる」のような、 $V_k$  が他動詞の場合である。このタイプの構文では、 $V$  が自動詞であるか/対格項のみを取るか/対格項と与格項を取るか、といった下位区分によって格標示の問題が複雑になるので、以下ですこし詳しく実態を見てゆくことにする。また、日本語の使役構文も同じタイプに属するので、併せて考察する。

- (1) Je fais travailler Jean. 「私はジャンを働かせる」
- (2) Je **le** fais travailler. 「私は彼を働かせる」
- (3) Je fais lire ce livre à Jean. 「私はジャンにこの本を読ませる」
- (4) Je **lui** fais lire ce livre. 「私は彼／彼女にこの本を読ませる」
- (5) Je fais lire ce livre par Jean. 「私はジャンにこの本を読んでもらう」

(1) - (5)の文例において、被使役者ジャンの地位づけを見て行くと、まず(1)のジャンは図7のNP<sub>n</sub>で、日／仏語の別なく使役動詞(させ/faire)から対格を付与され、日本語ではジャンをとっている。フランス語では実(名)詞に主格と区別される対格の標識はないが、接辞人称代名詞になれば、(2)の *le* となり、日本語でも「彼を働かせる」となって対格であることがはっきりする。このNP<sub>n</sub>の地位に入り込んだ情報は実は接合の対岸にあたるPP<sub>n</sub>から来ているのであるが、このようなことを詳しく見ていくために、図7の関連する部分を抜き出して、図8、図9として掲げる。

図8

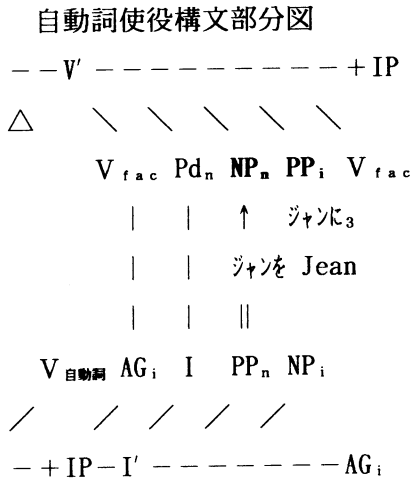
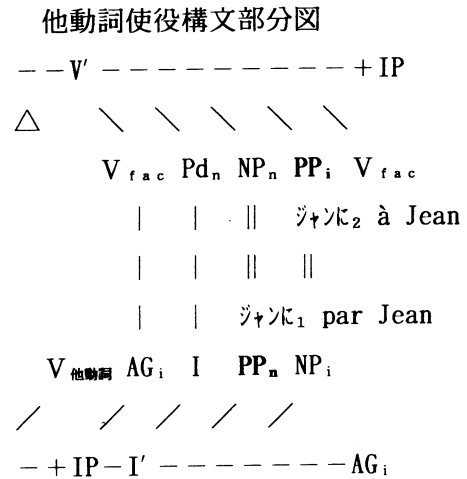


図9



(1)で、能動的な自動詞の唯一項はPP<sub>n</sub>の地位に生起したと考えられる。PP<sub>n</sub>は他動詞の能動者項の始発地位でもあるが、この点については別途考察する。(1)の *travailler* はそのような能動的(意志的・制御的)な自動詞である。この動詞がV<sub>k</sub>に位置を占め、PP<sub>n</sub>にはJeanが入る。PP<sub>n</sub>は使役節のNP<sub>n</sub>と接合しているので、JeanはNP<sub>n</sub>と地位づけられ、主節の動詞*faire*から対格を付与される。V<sub>fac</sub>(*faire*)とV<sub>k</sub>(*travailler*)とは節文接合によって(AG<sub>i</sub>を介して)隣接した位置にあるから、隣接して読み出されるのはごく自然である。日本語の場合〔働<sub>k</sub>--aせ〕も同様である。もっとも、フランス語の場合、音形化されるのは前(左)の方のV<sub>k</sub>だから、*faire*の位置とは隣接していない、と抗議されるかもしれない。しかし2回出現するV<sub>k</sub>は実は同じもの(の表裏)なのであり、一面が受けた隣接関係はすぐ別の面に伝送されるので、図に見る表面的な位置が離れていてもさしつかえないのである。以上の趣旨を図8で確認されたい。

(3)の場合、能動者のJeanが自動詞の場合と同じく起源的なPP<sub>n</sub>から接合相手のNP<sub>n</sub>になってしまうと、対格を付与されることになり、すでに対格をもっている従属節の目的語との区別がうまく行かなくなって聞き手に混乱をもたらす。この事態を回避するには二つの選択肢があり、それは(a)、(b)である。すなわち〔図9参照のこと〕…

(a) まず能動者JeanをPP<sub>n</sub>からNP<sub>i</sub>の地位に移す。これは、NP<sub>i</sub>がAG<sub>i</sub>と対結を作るか

ら妥当であり、対結の構造は能動態の独立節文を起動する基盤でもあった。AG<sub>i</sub> はもともとNP<sub>i</sub> が能動者であることを表わす資格述語であるが、自動詞唯一項はたとえ能動者であっても絶対的能動者であるのに対し、他動詞能動者は受動者に対する相対的能動者であるから、AG<sub>i</sub> と組んで対結を作ることはそれを明示する意義がある。そこで Jean をNP<sub>i</sub> から接合の相手PP<sub>i</sub> に位置づける。PP<sub>i</sub> には与格が付与される。

(b) 接合関係を無視して、現在あるままに従属節内でPP<sub>n</sub>として格標示〔(対格言語の)能格＝能動者を標示する主格と異なる格〕を与える。…以上のどちらかである。

(a)は(3)を産出する道へ進むが、(b)からは(5)が派生する。(a)の場合、主節のPP<sub>i</sub> は与格句と見てもよいものであり、実際、三人称単数の(接辞)人称代名詞になれば(4)のように特徴的なlui という単一の語形となる。一方、par で標示された能動者(被使役者)は受動文 Ce livre est lu par Jean. に出現するものと同じで、「能格句」である。

ところで日本語には、文例(1)－(4)のフランス語の訳文に相当する強制的な意味をもつ「」内の使役構文もあるが、許容的な意味をもつ別種の使役構文がある。

(6) 私はジャンに(のびのびと)働かせる

(7) 私はジャンに(自由に)この本を読ませる

(8) ジャンはのびのびと勤めさせてもらった／\*勤めさせられた

(9) ジャンは自由にこの本を読ませてもらった／\*読ませられた

(6),(7)が許容的な使役構文の例であるが、それらからは(8),(9)に示すように使役受動文を作ることができず、かわりに「てもらう」構文がその役目を果たす。このように日本語の使役構文は複雑な様相を示すので、節を改めて本格的に考察することにする。

## 5. 日本語の使役構文――強制と許容

日本語の使役構文には強制的ニュアンスをもつものと許容的なニュアンスをもつものがあり、自動詞使役構文ではその差が被使役者の「を格」標示と「に格」標示の差となって現れることが多い。文例(1)と(6)の対比に明らかである。しかし他動詞使役構文では、(3)と(7)を対比してみても、格標示はともに「に格」であり、その差がはっきり現れない。そこで、自動詞・他動詞どちらからの使役構文でも被使役者(というより被許容者)が「に格」標示される、許容的な受動構文から先に片付けよう。

日本語の許容的な構文(6),(7)では、意味上実行者の自発的意志性が重視されるので、動詞が自動詞か他動詞かを問わず、つまり図8においても図9においても常にPP<sub>n</sub>がNP<sub>i</sub>の地位に移され、AG<sub>i</sub>と対結を作らせられ、意志的な能動者性を確認される。そこでNP<sub>i</sub>がその接合の対岸のPP<sub>i</sub>と再分析される。従ってその格標示は与格である。このPP<sub>i</sub>は使役節すなわち主節の内部で必須斜格項であり、省略することはできない。「私は自由にこの本を読ませる」は、既に確立した文脈がない限り非文である。これに対し、強制的被使役者は情報的価値が低い場合、省略することができる。たとえば「国王は自分の(葬られ



るべき) 陵墓を作らせた」などにおいて、作ったのは当然臣下であり、更に言えばその命令に服して働いた土木工夫たちであるから、情報価値が低い。このような文において省略されている「に格」の項は、与格でなく「能格」を帯びていたと見做すべきである。

しかし、このような「能格= に格」が使役構文で省略できるのは、上の例のような極端な場合に限られ、たとえば「国王の陵墓が作られた」「窓が閉められた」などの受動文において、能動者が省略されたというより最初から無くて済んでいるのと比べると、やはり使役構文では能動者表現の必須性が或る程度高いように感じられる。その理由を説明するには、やはり図9に拠らねばならない。

図8においても図9においても、実行者= 被許容者ジャンの自主性が尊重される場合はジャンは（ここでは意志的）能動者資格述語AG<sub>i</sub>の項NP<sub>i</sub>となり、その接合の対岸にあたるPP<sub>i</sub>の地位に位置づけられることは既に述べた。「ジャンに<sub>2</sub>」「ジャンに<sub>3</sub>」として示したのはそのようなPPであり、与格を帯びている。一方、ジャンが実行者= 被強制者になった場合、ジャンはAG<sub>i</sub>と対結を組むNP<sub>i</sub>の地位を獲得できず、当面PP<sub>n</sub>の地位に留まる。図9の「ジャンに<sub>1</sub>」はそういうPPであり、「能格」を帯びている。ところが図8では、一旦PP<sub>n</sub>の地位に生じたジャンが、他動詞性をもつV<sub>fa</sub>。(させ)が目的語を要求するのに応じて、接合の対岸のNP<sub>n</sub>へと位置づけられ、対格を付与されて「ジャンを」となる〔フランス語でも同じ〕。このことから類推すると、図9の他動詞使役構文においてもV<sub>fa</sub>はやはり目的語を要求する筈であり、事情が許せば、PP<sub>n</sub>の「ジャンに<sub>1</sub>」を使役節の方に引き込んで、「ジャンを」としてNP<sub>n</sub>に位置づけたい所である。しかし、

(10)\*私はジャンをこの本を読ませる

「を格」が二つ連続する(10)のような文は文法関係の認知作業を煩雑化し、聞き手の苦勞を増加させるので非文とされる。そこでやむなくジャンはPP<sub>n</sub>に留まるのであるが、接合関係のお蔭で主節のNP<sub>n</sub>と（共指示関係で）結ばれていることは否定できない。従って、今は当面PP<sub>n</sub>の地位に待機しているものの、主節のNP<sub>n</sub>の機能も併せもっている、というのが「ジャンに<sub>1</sub>」の性格であろう。その傍証として、使役受動構文を考えてみよう。

(11)先生がジャンを休ませた〔強制的に〕

(12)ジャンが先生に休ませられた

(13)先生がジャンに論文を書かせた〔強制的に〕

(14)ジャンが先生に論文を書かせられた

強制的な使役構文では受動化が可能であり、(12)が(11)に、(14)が(13)に対応する。ここで、2. で述べた受動文の産出過程を回顧されたい。図5を見ると、受動文の主語にはNP<sub>i</sub>すなわち目的語が選ばれてなっている。従って(12)でジャンが主語に進出したことの前提には、対応する能動文(11)でそれがNP<sub>n</sub>になっていることが必要である。これから類推すると、(14)が成立するためには、(13)のジャンにが単にPP<sub>n</sub>の地位にあるだけでなく、主節の目的語NP<sub>n</sub>の性格も兼務していると考えられる。これが必須性の原因である。

## 6. フランス語の使役構文再訪

フランス語の使役構文には4. で大ざっぱに触れたが、本節では、必須与格項を含む他動詞使役構文(15)-(17) の場合を説明の対象にする。また説明の理解にはやはり図9を参照されたい。

(15)\*Je ferai écrire une lettre au directeur à Jean.

(16) Je ferai écrire une lettre au directeur par Jean.

「私はジャンに社長\* へ手紙を書かせよう」〔※部長、校長の解釈も可〕

(17) Je lui ferai écrire une lettre au directeur.

「私は彼（／彼女）に社長\* へ手紙を書かせよう」

日本語の許容的な使役構文では常にPP<sub>n</sub> がNP<sub>i</sub> の地位に移され、その接合の対岸のPP<sub>i</sub> と再分析されたが、フランス語においても単純な他動詞使役構文ではそれが起こり、NP<sub>i</sub> は与格に標示された。しかし(15)のように従属節の中にすでに与格句 *au directeur* ( *to the director* )がある場合は、被使役者の格標示を(3)と同様に与格にすると、聞き手に混線をもたらすので非文となる。そこで、被使役者のもう一つの格標示手段すなわち「能格」を使って、(16)のように *par Jean* と言わねばならない。つまり今度もまた混線为了避免のために、被使役者はPP<sub>n</sub> の地位に留め置かれるのである。ただし絶対的に与格の地位が駄目だというわけではなく、ジャンのことが話題となっている談話環境のもとでは、ジャンを指示する接辞人称代名詞を使って(17)のように言うことは許容される。要は〔主節のPP<sub>i</sub> が接辞となることによって〕与格の項が衝突混線しなければよいのである。

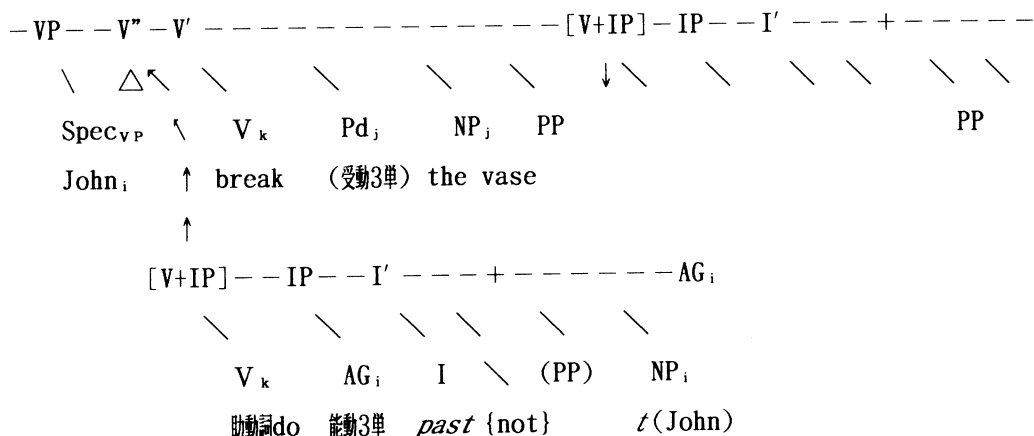
結局、フランス語では、被使役者をなるべく主節（使役節）に組み込もうとして、対格項・与格項の順に、被使役節からの混線の恐れのない「空きポスト」を探して、探り当てた地位に被使役者を嵌め込むが、ついに駄目ならもとの（被使役節の）「能格」で諦める、という戦略を取る。日本語でも基本的には戦略は同じであるが、ただ日本語では許容的な使役構文があって、「に格= 与格」の地位がそこで消費されてしまうので、通常の〔目的語だけが必須項の〕他動詞が絡む強制的使役構文の段階で、早くも「に格= 能格」が現れなければならないのである。

## 7. 英語の do-来援の問題――接ぎ穂切断箇所の変更

英語が疑問文や否定文で示す助動詞 *do* の来援の問題は、同じVが二重に出現するわが「VP内IP図式」にとって良い顧客である。すなわち2回のV<sub>k</sub>のうち、一つを *do* とすればよい。具体的には、直轄統率領域を統率する上位（左側）のV<sub>k</sub>を実語彙的な動詞とし、基底でIに近い下位（右側）のV<sub>k</sub>を代役の *do* とする。そして現像に際しては、*do*の枝の分岐点から切断して移転するのである。すなわち、単にIPだけが上昇するのではなく、助動詞 *do* とIPとの複合体[V+IP]ができ、その節点を含む下の部分が上昇し、△位置に接ぎ木されて現像されるとすればよい。

図10 強調肯定／否定文の成立過程

例文: John did {not} break the vase.



この図10で、bottom-up 式に助動詞 do まで含み込んでできた範疇複合体[V+IP]は、これをVの投射すなわちV'と見ることはできない。もしそう見ると、IPがVに統率されることになり、たとえ△位置に接ぎ木しても、時制機能や主格付与機能が抑圧されるからである。従って、この内容空虚な do の場合は特例であり、IP節点に付加されたと考えることもできよう。この do がAG<sub>i</sub>（主語に関する人称・数などの情報）とIとを抱えこんでしまうので、実語彙的動詞 break は屈折できず、「原形」のまま放置されるのである。

## 8. まとめ

本論考でなされた主張の基調低音は「VP内IP説」であり、日・仏・英語の態構文や使役構文とそれが深く関わるものであることを示した。ここでいうIPは主語と時制〔ともに話者の視点のreference pointを確立するもの〕の情報複合体である。それが潜在状態から顕在化される過程で働く、スイッチ範疇と接合刻印の概念も併せて提案した。

## 参考文献

なにぶん新説なので「VP内IP説」そのものには先行文献がまったくない。使役構文についてはComrieの、次の2点を挙げておく。

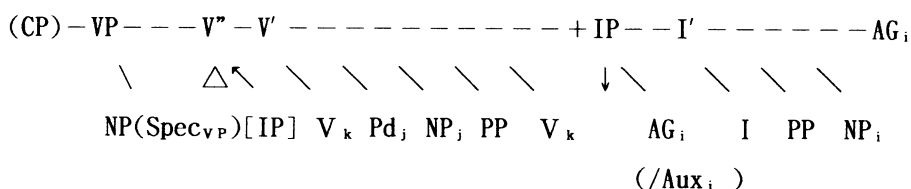
- ①Comrie, Bernard (1976) "The Syntax of Causative Constructions: Cross-Language Similarities and Diversities". *Syntax and Semantics 6* (M. Shibatani ed.). New York: Academic Press
- ②\_\_\_\_ (1989) *Language Universals and Linguistic Typology*. 2nd ed. Oxford: Basil Blackwell
- ③田原 薫 (1986) 「能動と受動の交差現象を考える——位相論的統語観の見地から」『言語研究』第90号, pp. 27-47, 東京, 日本言語学会

## English- vs. Franco-Japanese-type Causative Construction in IP-within-VP Schema

Kaoru TAHARA

Contrary to most syntactic theories which adopt hierarchical constituency structure as a self-evident matter like an axiom of mathematics, which place the so-called INFL(ection) over the VP (consequently INFL c-commanding VP, thus, IP dominating VP), and where the whole clause's representation is a VP-within-IP schema, what I propose now for the clause structure is an IP-within-VP schema, under which a clause will be regarded as a VP, the maximal projection of a verb which governs not only the object and necessary oblique complements on the one hand, but also the IP dominating the potential INFL and the candidate NP for subject, on the other. Its typical example is illustrated as follows:

Fig.



[where Pd and AG are abstract adjectival predicates which mark the NP with the same index depending on whether it is undergoer or actor (typically), respectively. Note that the same verb appears twice: once as governor of inner arguments including NP<sub>i</sub> (the object), and secondly as governor of IP involving as its part the subject-candidate NP<sub>i</sub> which is not yet case-marked with any case.]

When in the stage of this figure, the IP is still covert, implicit or (as it were) submerged: not allowed of its expression. But when it is promoted, and grafted to the  $\triangle$ -marked node, IP turns overt as if a film were developed into images in photography, and motivates the verb into a finite form, at the same time assigning nominative case to  $NP_i$ , which finally moves into the status of  $Spec_{VP}$  i.e. clausal subject.

I applied this notion of clausal composition to the analysis of the French- or Japanese-type causative construction, which, unlike English, comprises serial verb structure such as *faire lire* or *yom-aseru*, with different treatment of case marking between transitive and intransitive causees. In the process of the study, I came to the conclusion that such an idea is important that one clause is juxtaposed (spatially) and adhered to another and imprints informations on it. This notion explains the above-mentioned type of causative construction elegantly. I would like to call that process 'juxtahesive impression.'